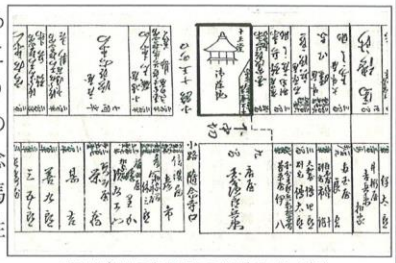
校長室だより
NO.　１４
令和元年６月20日

すべては光る

梅園小学校長
たか　す　りょうへい
髙　須　亮　平

梅園再発見３０　～十王堂とともに栄えた十王町と芭蕉俳諧文化

梅園学区の珍しい町名の１つに十王町をあげることができます。この名前は、十王堂があったことから名付けられたようです。江戸時代の文政９（１８２６）年「伝馬町家順間口書」には、右のように十王堂の位置を確認できます。現在の随念寺から南に下った伝馬通との交差点南西で、伝馬３丁目です（右写真）。この道は南に下ると満性寺につながり、塩の道の始まりとなっていました。十王町は、市役所西から西照寺辺りの一帯です。


江戸時代の伝馬町の町並み(上:南)

十王堂の「十王」とは閻魔（えんま）大王を筆頭とする冥土（めいど）で死者を裁く１０人の王を表し、それらを祀（まつ）る十王信仰と結界鎮護（寺院などの領域を護ること）の意味もありました。

十王堂があった現在の位置
（伝馬４丁目西交差点）

十王堂は、もとは観音堂と言われていましたが、寛文元（１６６１）年に、岡崎城主の水野監物忠善が大用和尚に帰依して再興した寺で、伝馬町の曹洞宗焔魔（えんま）山頭陀寺十王堂と言いました。十王町もその頃から形成されたと言われています。願主は、知多郡岩谷安法法師という僧でした。当初より、旧暦７月１３日より１６日まで祭礼が行われ、夕刻頃より飲食の露店が建ち並び、参拝者が多く賑（にぎ）わいを見せていました。堂前には高札所（法令を板面に掲示して民衆に周知させる所）があり、駅舎（宿場）の中央に位置する繁華地でした。上の文政９年の図では、高札所は現在の旅州社の位置に移っています。十王堂には観音堂一基、弁財天の祠一基、石燈籠一基が元久年間（１２０４～０６）に寄附されています。

境内には三秀亭李喬（さんしゅうていりきょう）（本多兵部忠寛、岡崎城主本多中務大輔忠良の五男）らの同好の武士により建てられた芭蕉碑がありました。これは、寛政５（１７９３）年の松尾芭蕉の百回忌に、供養のため石州（石見国、現・島根県西部）産の石を取り寄せ、芭蕉の句「都出（みやこいで）て神（かみ）も旅寝（たびね）の日数（ひかずかな）哉」をその石に刻んだものです。その説明が『三河名勝志』に掲載されています。（右）

芭蕉百回忌の旅寝塚（三河名勝志）

なお、この句碑は、昭和１９（１９４４）年、空襲のため曹洞宗金寶山安心院（明大寺町馬場東）に移されました。現在の碑は次ページのようで、三河名勝志の絵とよく似ていて、その信憑性を感じます。碑は高さ７５㎝、幅６０㎝の自然石の中央を丸く彫りくぼめ、そこに句が彫られています（☜部分）。文字は風化して読めず残念です。安

心院には平成１２年に同じ句で、新しい芭蕉碑が建てられています。（裏面１③ｂ写真）

この頃の岡崎・矢作の俳人たちは、芭蕉５０回忌の「夏草塚」、７０回忌の「蛙塚」、百回忌の「旅寝塚」「麦塚」を裏面１①～④の写真のように建立しました。これは、この地方における芭蕉俳諧文化の発展と隆昌を証明するもので極めて意義深いものです。このような動きの中で、岡崎は城下をあげた俳諧の隆盛を見ることになり、それが、後に俳人として名声を高めた鶴田卓池を生むことになったのでした。

十王堂から移された安心院の芭蕉碑

この句碑の建立に関して、李喬（りきょう）らは『旅の日数』をいう記念集を刊行しています。それには、「都出て」の句は、芭蕉が菅沼曲水（すがぬまきょくすい）（近江国膳所（ぜぜ）、現・滋賀県大津市の武士・俳人）からの書簡への返事の中で詠（よ）んだこと、その場所が岡崎であったこと、その書簡を後に芭蕉の門人から入手し伝来してきたこと、その書簡の筆跡をそのまま碑に刻んだことなどが記されています。ここで、この句が本当に岡崎で詠まれたかどうかが知りたいところです。芭蕉の書簡は、裏面２のように現存し、それが芭蕉の筆跡ということは分かっているようですので、その内容をもとに推察してみます。

このときの芭蕉は「奥の細道」を終えて、２年余り伊賀、大津、京都に滞在していました。元禄４（１６９１）年９月（旧暦）に膳所（曲水の地）から江戸に戻る途中、熱田から岡崎まで持参した曲水の書簡を、伝馬町の旅籠の行燈（あんどん）のもとで開いて読んでいることが書かれています。そして、曲水の厚情への感謝の気持ちを書簡に記しています。しかし、実際にこの返事を書いたのは、１１月に江戸深川の芭蕉の草庵ですので、句を詠んだのは深川かもしれません。また、他にも沼津という説もあります。そう考えると、この資料だけでは岡崎で詠んだことの可能性は薄くなります。

次に句の意味です。この芭蕉の旅は、ちょうど神無月（１０月）の１か月余を要しています。１０月は八百万の神々が出雲へ集い参らす月であることから、神々も今頃は旅寝の日数を過ごしているだろうと、芭蕉自身の旅から旅への日数を指折り数える姿と重ねている意味ととらえられます。その旅寝の場所の１つである岡崎で曲水の厚情への感謝の気持ちを強く感じ、そのことをもとに江戸での返事となっています。そのようなことから、岡崎でこの句が草案された可能性はあるかもしれません。

推察はその程度ですが、李喬（りきょう）らが芭蕉百回忌に十王堂に句碑を残したこと、碑を建立した当日に句会が盛大に催されたことなどは、芭蕉俳諧文化が伝馬に広がっていたことを表していることは明白です。併せて、そのときに句碑の下に芭蕉が身に付けていたという俳諧袖（はいかいそで）を埋収したことも記されています。この記念集『旅の日数』により、李喬の名声は天下に認められ大名や大名家の公子たちと交友が深められました。

最後に、十王堂については、明治元（１８６８）年に一度焼失しましたが、その後、現在の十王町１丁目に再建され、十王町の人々によって大切に守られてきました。しかし、岡崎空襲で再び焼失し、戦後の戦災復興事業の区画整理時に不在地主であったために再建されることなく、現在に至っています。

今回は『旧岡崎市史』『新編岡崎市史』『岡崎の碑』等を参考にしています。また、明大寺町の安心院住職様にご協力をいただきました。

1　岡崎市に現存する芭蕉の句碑

①【夏草塚･50回忌】鴨田町･西光寺	「夏草や兵どもがゆめの跡」	寛保 3(1743)年
②【蛙塚･70回忌】矢作町･誓願寺	「古池や蛙飛込む水の音」	宝暦12(1762)年
③【旅寝塚･百回忌】十王町･十王堂、現･明大寺町･安心院		
	「都出て神も旅寝の日數かな」	寛政 5(1793)年
④【麦塚･百回忌】藤川町･十王堂	「爰(ここ)も三河むらさき麥のかきつはた」	寛政 5(1793)年
⑤ 奥殿町･熊野神社	「曙や末た朔日にほととぎす」	慶応 3(1867)年
⑥ 梅園町･春谷寺	「道のべの木槿(むくげ)は馬に食われけり」	明治13(1880)年
⑦ 康生町･岡崎城本丸	「木のもとに汁も鱠もさくらかな」	明治37(1904)年
⑧ 美合町･美合川高橋畔	「草の葉を落つるより飛ぶほたるかな」	明治37(1904)年

①【夏草塚・50回忌】
鴨田町・西光寺
寛保３（1743）年

②【蛙塚・70回忌】
矢作町・誓願寺
宝暦12（1762）年

③【旅寝塚・百回忌】
a　十王町・十王堂
現・明大寺町・安心院
寛政５（1793）年

b　明大寺町・安心院
平成12（2001）年

④【麦塚・百回忌】
藤川町・十王堂
寛政５（1793）年

⑤　奥殿町・熊野神社
慶応３（1867）年

⑥　梅園町・春谷寺
明治13（1880）年

⑦　康生町・岡崎城本丸
明治37（1904）年

⑧　美合町・美合川高橋畔
明治37（1904）年

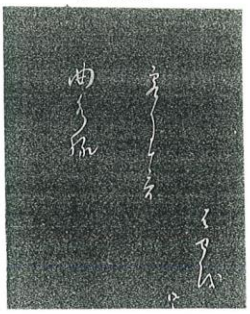
2　芭蕉直筆の書簡（全６枚）

（３枚目）

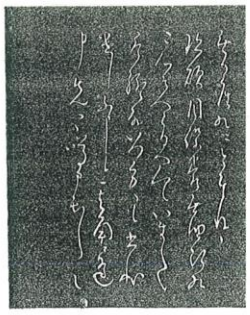
（２枚目）

（１枚目）

（６枚目）



（５枚目）



（４枚目）

１枚目の初めの部分に「都出て神も旅寝の日数哉」の文字が見られます。

３枚目の初めの部分から、岡崎の記述が始まります。６行ほど読んでみますと、「（曲水の書簡を封のまま）岡崎の驛まで持参候而　窓の破れより風吹入　戸の透間より月もかゝれる　いをの油のなまくきよごれ　行燈の前に而御文先開く　泪紙面にそゞ……」というように曲水の書簡を読んでいる様子を書いています。